

No.	名称	説明文	所在地
1	善知鳥峠	訪山断層の断層鞍部に位置する峠。太平洋側へ流れる天竜川水系と、日本海側へ流れる奈良井川の中央分水嶺になっており、峠には分水嶺の碑もある。江戸時代から明治の初期までは、中馬街道の発着点の松本と飯田を結ぶ伊那街道の峠として人馬の往来で賑わった。そのため峠から北小野にかけての地区内には、馬の供養や安全祈願のために建てられた石の馬頭観音が非常に多い。	塩尻市上西条～北小野
2	びつたら橋	江戸時代末期まで、諏訪湖の排水を妨げるような橋を架設することができなかったことから、川の中に石を置き、その上に板を渡して渡った。板が安定するように石の上に平らなくぼみを彫り、増水時、板が浮いても流れないように、綱を石の穴に通して結んだ。通行人が歩くと、橋板がたわんで川面を「びたびた」と打つため、「びつたら橋」といわれたという。	岡谷市御倉町
3	牛首峠	霧訪山断層の断層鞍部に位置する峠。昔、長者ヶ平の屋敷に住む娘が若い僧と恋仲になり、底無し沼に身を投じて命を落として以来、お供していた牛が暴れるようになったため、その首を落とし峠の中腹に葬った、というのがこの峠の由来といわれている。古くは、大久保長安により1616(元和2)年に整備された初期中山道(小野街道)でもあった。峠近くの前山には、当時築かれた江戸より60里の一里塚が1基現存する。	辰野町小野
4	東天竜一貫水路	辰野町平出の天竜川左岸で取水される、総延長9,140mの幹線用水路。1927(昭和2)年に用水に取水する頭首工が建設された。頭首工の表面は、自然石を配置し、堤体はカーブしている。東天竜用水路頭首工は日本の近代土木遺産(現存する重要な土木構造物2800選)に選定されている。	辰野町平出～赤羽～樋口、箕輪町北小河内
5	北の沢眼鏡橋	北の沢川(辰野町)の谷を最短ルートで渡ることができるように造られた橋。1889(明治22)年に完成。橋台が石積み、アーチ部は煉瓦積みで、「眼鏡橋」と呼ばれた。国登録有形文化財及び信濃の橋百選に選定されている。	辰野町羽場
6	伊那路橋	江戸中期には架設され、伊那路と江戸を結び中馬輸送を支えた街道の橋。伊那路と中山道の下諏訪宿を最短で結ぶ岡谷道(諏訪道)の整備とともに往来が盛んになった。当時の橋は「大橋」と呼ばれており、経費を幕府が負担する「主要街道の橋」と位置づけられていた。現在の橋は1994(平成6)年に架け替えられたものである。信濃の橋百選に選定されている。	箕輪町東箕輪～中箕輪
7	(旧)深沢川水路橋	西天竜幹線水路事業で深沢川(箕輪町)の谷を越えるために造られた水路橋。1927(昭和2)年に完成した。日本の近代土木遺産(現存する重要な土木構造物2800選)及び信濃の橋百選に選定されている。	箕輪町中箕輪八乙女
8	西天竜幹線水路 円筒分水工群	西天竜幹線水路から水を分けるために設けられた分水施設群。水田の面積に応じた穴の数により公平な水の供給ができるようになった。現在、円筒分水工が35基活用されており、大小の分水を加えると実に83基に上るとされる。2006(平成18)年に土木学会選奨土木遺産に認定された。	辰野町、箕輪町、南箕輪村、伊那市
9	杖突峠	伊那市高遠町と茅野市の境界にある峠。標高1,247m。国道152号が通っている。杖突峠の西南西に位置する「守屋山」は諏訪大社のご神体であり、かつてこの峠では神降ろしの儀式が行われていた。降りてきた神がはじめてその杖を突く場所がこの峠であるとされたことから、杖突峠という名がついたとされる。	伊那市高遠町～茅野市

No.	名称	説明文	所在地
10	芝平石灰岩採掘場跡／芝平集落	伊那市高遠町芝平は中央構造線の外帯に位置する。純度90%を越える炭酸カルシウムの石灰岩が豊富に産出し、江戸時代の1834(天保5)年には高遠藩に産物会所が置かれた。幕末から国鉄中央線が開通する1904(明治37)年までが最盛期で、毎日100頭を越える馬の列が山道に連なり、「仕事が豊富で栄え、よその村から多くの人が働きに来た」と1884(明治17)年の記録に残されている。芝平からは茅野方面への経路が一番近く、一日で往復し、石灰と同様に炭も搬出されていた。採石場跡周辺には切り出された石灰石を運ぶために敷かれたトロッコ道、窯の石組みなどが残り、石灰岩と窯の跡は伊那谷を通じて最もよい状態で残っている。芝平集落は採掘場の近くにあり、採掘最盛期は大変賑やかであったが、三六災害の後、多くの住民が移住し始め昭和50年代には集団移住により集落はなくなった。	伊那市高遠町
11	木曾山用水	奈良井川の源流白川より水を取り、権兵衛峠まで山腹を等高線に沿うようにして導き、峠を越えて北沢川へ流すための水路。経ヶ岳山麓扇状地上の四箇村(与地・大萱・中条・上戸)は幕府領であり、高遠藩が水利権を持つ小沢川から取水ができず、灌漑用水に恵まれていなかった。 小沢川下流の高遠領三箇村(御園・山寺・西伊那部)と幕府領である四箇村との用水確保の水争いは、1730(享保15)年頃から140余年に及んだ。 1871(明治4)年、廃藩置県により筑摩県となり、水争いを治めるために県から派遣された本山盛徳(権中属(県の役職))により、小沢川の支川北沢川からの引水の許可がおりた。これは江戸時代には考えられない画期的なことであった。 与地と大萱は、北沢川の赤岩と平岩からそれぞれ水を引いた。しかし、中条・上戸の村が小沢川から水を引くには十分な水量がなかったため、木曾谷の水を為替水の仕組みを利用して北沢川に流し取水することを計画した。1883(明治16)年、延長約12kmの用水路(木曾山用水(別名:上戸中条井))が完成した。	塩尻市(旧木曾郡檜川村)～伊那市上戸、中条
12	権兵衛峠	権兵衛峠は経ヶ岳と駒ヶ岳連峰の鞍部に開かれた標高1,522mの峠。中仙道が通り宿場の多い木曾は、稲作に適さない地形のため米が不足していた。そこで木曾の牛方・古畑権兵衛が宿場側の意を受け、伊那谷より米の移入をスムーズにするため木曾谷と伊那谷との交通路として改修した。難工事の末、1696(元禄9)年に開通。財政難の高遠藩が借財のために領内の年貢米を木曾に送り出したという背景もあった。	南箕輪村北沢、塩尻市栴洞沢
13	御子柴艶三郎の井／横井戸群	経ヶ岳山麓に広がる南箕輪村から伊那市にかけての扇状地は、保水力が弱く、常に灌漑用水が不足する土地であった。このため段丘崖下に湧き出す水脈を頼りに、横井戸を掘って水を集め、細々と飲用や、灌漑に利用してきた。多くの井戸は明治始めから明治30年ころに掘削され、南箕輪村には苦労して掘った21本以上の横井戸があったが、1928(昭和3)年に、西天竜一貫水路が完成した後は、あまり活用されなくなった。南箕輪村役場付近には現在も横井戸が確認できる場所がある。また、役場の北西1kmほどの道路脇には、道路改修工事の際に見つかった「東垣外横井戸」の碑が立っており、東屋もある。現在確認できる横井戸の中で代表的な井戸が、伊那市上荒井地区の「御子柴艶三郎の井」である。 御子柴艶三郎は私財を投げ打ち、神に命を捧げる約束のもと横井戸の掘削を行った。1898(明治31)年、苦労の末に水脈を発見。1900(明治33)年12月、約束通り命を絶った。この井戸は水量が多く、一帯の約40haが水田となった。水神宮・碑・穂坂式分水タンクなどが現存する。	伊那市荒井
14	西天竜幹線水路 流末の階段工(小沢のそばん滝)	西天竜幹線水路の末端の水を小沢川へ落とすためにつくられた階段工。困難な工事の末、完成した。その後、用水の落差を活用した発電所が東側に設置されることとなり、発電所は1961(昭和36)年に完成した。用水路の水は導水管により発電所に入ることとなり、それ以来、階段工は使われなくなった。	伊那市小沢
15	小黒発電所	伊那谷に現存する一番古い発電所。小黒川上流に、長野電灯(株)が建設し1913(大正2)年に完成。1915(大正4)年、伊那電気軌道(株)へ譲渡され、伊那電気鉄道に電力を供給する等、上伊那地域の発展に大きく寄与した。現在は中部電力(株)が管理している。建設当時は、約2km上流の取水口から発電所の真上に見える水槽まで木の樋を使い、導水路延長1,358m、落差226mで、250kwの発電をしていた。現在は機械の取替えにより1,100kwの発電が可能である。2013(平成25)年に、運転開始から100年の記念式典が行われた。	伊那市伊那

No.	名称	説明文	所在地
16	大橋	古くは通船の船着場であった場所。今昔とも往来の要衝にあるこの橋は、近隣では大きさも際立っていたことから、自然に「大橋」の名が定着した。この橋の記録は、織田軍の侵攻(1582(天正10)年)の記述がある『下条記』に「伊那部前之橋」とあるのを筆頭に、『信濃国絵図』(1647(正保4)年)や絵巻『高藩探勝』(1743(寛保3)年)にも描かれるなど、古くから記録が残っている。長い期間「木橋」だったが、1933(昭和8)年に永久橋となった。信濃の橋百選に選定されている。	伊那市中央～坂下
17	入舟船着場	江戸時代から船着場として利用された場所。明治になって通船が盛んになり、運行も多く行われた。明治30年代になると、坂下と時又間の定期通船も始まった。大橋のたもとにあり、弁財天宮の脇に1971(昭和46)年建立の史跡標柱が残されている。	伊那市坂下
18	段丘崖及び断層崖の斜面樹林	天竜川及び三峰川などの河川沿いには段丘崖、断層崖が発達し、数段の連続した崖によって独特の地形を形成している。崖には連続的な斜面樹林が発達し特有な景観を造りだしている。三峰川の河川沿いには北に「美篤段丘」が、南に「富県段丘」という大型の扇状地侵食台地が広がり、古くから人々の暮らしの場となってきた。天竜川左岸に発達した段丘を一望できるビューポイントとして、対岸の伊那スキーリゾートが挙げられる。	伊那市
19	ふるさと美篤の水の話(出版物)	「ふるさと美篤の水の話」は、1995(平成7)年に美篤小学校4年1組(担任 諏訪博教諭)が1年間にわたって一番井と二番井を調べ、まとめた冊子である。郷土学習の一環として行われた教育成果の報告書であり、一番井や二番井さらに北原平八郎翁の苦労が詳しく調べられている。小学4年生の児童が三峰川の洪水との戦いや利水開発の歴史を自ら調べ、将来に伝承していく意思を示した極めて優れた資料である。	伊那市美篤
20	さんよりこより	美篤の川手地区の天伯様と富県桜井の天伯様に伝わる七夕祭りで、三峰川の洪水を鎮める目的で毎年8月7日の七夕祭の日に行われる。子どもたちが「さんよりこより」という掛け声とともに鬼を叩き、その後大人が神輿を担いで川を渡るお祭り。伝承によれば、室町時代の中期、1427(応永34)年、藤沢片倉(現高遠)に居られた天伯様が洪水によって富県桜井に流れ着き、その後再び洪水によって美篤川手に流れ着いた。これを縁として、桜井と川手に天伯様をお祀りしたのがはじまりとされ、足利時代の1472(文明4)年から続いていると言われている。	伊那市美篤、富県
21	三峰川の霞堤	堤防の一部を切り、下流側の堤防を田んぼや村のある方へ斜め上流に延ばし、ある程度の長さによって上流からの堤防と並行するようにした治水構造物。洪水の一部を氾濫源に逆流するように導き、堤防の決壊を防ぐとともに洪水を調節する効果がある。	伊那市美篤
22	伝兵衛五井／三峰川流域の用水路	三峰川流域では幾度も井筋の掘削が試みられ、幾筋もの用水路が造られてきた。伊東伝兵衛が手がけた井筋の中で、代表的な5つ(鞠が鼻井筋(春富大井筋・伝兵衛井)、大島二番井(六道二番井)、小原井筋(太田井、勝間下井)、お鷹岩井筋(黒河内新井筋)、上伊那井筋(伝兵衛堰/辰野町))は総称して伝兵衛五井と呼ばれる。伝兵衛五井以外では、伊那市長谷の黒川の上流から引かれた和泉原井筋、美和ダムの残存営農対策で黒川から引かれた美和一貫水路、山室川から引かれた月蔵井筋、藤沢川から引かれた六道原一番井などがある。これらは、復旧・再建工事など、多くの人々の努力による維持管理や改良を重ねて現在にいたっている。	伊那市富県～東春近
23	美篤青島の千社参り	伊那市美篤青島区で続く年中行事。毎年、土用入りの7月20日前後の日曜日に全戸が参加して行われる。諏訪社で神事を行った後、隣組の組長がくじ引きをして担当地区を決め、「千社参り」と刷られた千枚のお札を市内各地の寺社や石造物に奉納する。青島区は江戸時代から三峰川の氾濫に苦慮してきた歴史があり、その水害に対する鎮魂の願いがこの行事の発端及び継続の一因と推定される。	伊那市美篤

No.	名称	説明文	所在地
24	虹橋	1958(昭和33)年に完成した高遠ダムから取水した水は、かんがい水路を通り、三峰川両岸一帯へ運ばれ、約2,500haの農地を潤している。虹橋は、この水を三峰川右岸側へ運ぶための水路橋。用水は、左岸の伊那市高遠町小原から三峰川を水路橋で渡った後、右岸1号、2号幹線に分かれる。両岸が絶壁となっている場所を、アーチ型で渡り、建設当初から「虹橋」と呼ばれる。	伊那市高遠町～美篤
25	秋葉街道	秋葉街道は、近世中・後期から、火防の神としても知られる秋葉神社参詣のために盛んに利用された道。①高遠町的場－長谷－分杭峠－大鹿村－地藏峠－南信濃－青崩峠－遠州に至る道筋、②飯田市八幡－飯田市下久堅・上久堅－小川路峠－南信濃で合流、の二つの道筋がある。秋葉信仰が広まる前から存在していた古い道で、諏訪からは、太平洋への最短経路であった。古来より、天竜川など大きな川は越えることが困難であった。中央構造線に沿う道は、直線であつ、大きな川がないため東西間の交通路として盛んに使用された。	伊那市、大鹿村、飯田市
26	板山露頭	高遠市街地から国道152号線を北へ約4km、長藤板山にある正法寺裏の駐車場のすぐ上に位置する中央構造線露頭。露頭より北側に位置する板山露頭展望台からは、中央構造線のずれ動いた断層部分が侵食されてできたまっすぐな谷を遠望できる。左右のでき方が違う大地がずれ動いてできた境界で、急峻な西側の斜面と緩やかな東の斜面により、全く異なる地質が接している様子が観察できる。	伊那市高遠町長藤
27	美和ダム	1959(昭和34)年に竣工。三峰川に建設された高さ69.1mの重力式コンクリートダム。洪水調節・灌漑・水力発電を目的とする、国直轄のわが国最初の多目的ダム(特定多目的ダム)である。中央構造線の破碎帯基盤岩の上に建設されている。建設当初より、上流域から供給される土砂堆積が進み堆砂率が悪化したため、上流から流れてくる土砂をダム湖に貯めず下流に流すバイパストンネルが建設された。	伊那市高遠町
28	溝口露頭	美和ダム湖中央部(長谷溝口、神田橋のすぐ上流)にある吊り橋の右岸側に位置する中央構造線露頭。この露頭では、内帯の領家帯側には非持トータル岩・砂泥質片麻岩が露出し、外帯の三波川変成帯の間に、地質境界の中央構造線が観察できる。両者は断層運動を受けて断層破碎岩や断層粘土になっている。さらに中央構造線に沿って、約1500万年前に貫入している幅4mの珪長質岩脈がみられる。南方を遠望すると分杭峠の断層鞍部が眺望でき、周辺は中央構造線公園として整備されている。	伊那市長谷溝口
29	浦・黒河内森林鉄道跡	浦森林鉄道は、1939(昭和14)年、赤石山系の豊富な森林資源を開発するため、三峰川沿いの浦国有林に敷設された。現伊那市長谷の杉島貯木場を起点とし、南荒川終点まで23.6kmが整備された。1959(昭和34)年8月の台風と、1961(昭和36)年の三六災害で壊滅的な被害を被った。1964(昭和39)年に林道が完成し、浦森林鉄道は廃止された。黒河内森林鉄道は、1939(昭和14)年、伊那市長谷黒河内の蟹坂貯木場(現保養センター仙流荘)を起点に小黒川沿いに敷設された(総延長19.8km)。戸台には70戸ほどの集落があり、森林鉄道は、木材、薪炭、生活物資、人員輸送も兼ね、黒河内国有林の動脈として機能し、生活に密接な関わりを持っていた。1956(昭和31)年に全線廃止された。	伊那市長谷
30	粟沢川掘り抜き	市野瀬集落の中を流れる粟沢川は、氾濫を繰り返し、集落はたびたび洪水に見舞われた。1843(天保14)年、名手馬場孫左衛門が藩の許可を得て、城山の南の尾根を掘り抜き、粟沢川の流路を三峰川へ繋げるように変更する大工事を実施した。	伊那市長谷市野瀬
31	伊那市諏訪形の猪垣	江戸時代、イノシシやシカなどによる農作物への被害を防ぐために、藤沢川から大田切川に至る標高700mの地域に造られた柵。現在は、伊那市史跡の猪垣が残り、土手の上に乱杭を連ねた木柵が復元されている。	伊那市西春近

No.	名称	説明文	所在地
32	北の城橋	つり橋としては天竜川の最上流に架かる橋。たびたび水害に遭うため渡船が常用されていたが、1928(昭和3)年につり橋が架けられた。現在の橋は1958(昭和33)年7月の豪雨災害による崩落の後に修復されたもの。名前の由来は、中世の史跡「北の城」による。信濃の橋百選に選定されている。	宮田村中越～駒ヶ根市東伊那
33	大久保発電所	下流に計画された南向発電所の工事用電源を確保するために、1926(大正15※)年11月から1927(昭和2)年9月にかけて、天竜川電力(株)がわずか10か月で建設した。天竜川本川にできた最初の発電所。高い落差を利用した発電所と異なり、落差が5.7mと低い全国でも珍しい発電所。多量の水の水圧を利用したダム式で、4台の水車が回転し発電する。大久保ダムは堰堤高約3.5m、長さ約26m。発電所はダムの約376m下流にある。南向発電所建設以後は、発電した1,500kwの電気を上伊那地区の家庭と工場に送っている。	駒ヶ根市東伊那
34	阪本天山の壘田の碑	天竜川左岸側の塩田川と右岸側の太田切川の合流点であるこの地域一帯は、天竜川が常に流れを変え、手のつけられない荒地だったが、1789(寛政元)年の大洪水で一帯が干潟になった。大久保村の中村道民は、3年の歳月を費やし、川岸に三重の堤防を造り、岩を穿って暗渠で用水を通して干潟を開田した。高遠藩の阪本天山(江戸期の有名な砲術師範)は壘田事業に感嘆し、目立つこの巨石に記念の文を刻んで石碑とした。風化しやすい花崗岩に刻まれた碑文は、風化して大部分が判読できない。巨石は中央アルプスの頂上付近から氷河によってしらび平まで押し出され、土石流によって太田切川を下り、天竜川を横切ってここまで運ばれたものとする説があったが、近年では壘田の碑は周辺に存在する塩田花崗岩であり、北東の山麓から流下した石であるとされている。	駒ヶ根市東伊那
35	千畳敷カール	千畳敷カールは、宝剣岳直下に広がるU字形の氷河地形のこと。駒ヶ根市の町中から見える。伊那谷は日本で唯一、盆地底から氷河地形が見える場所である。氷期には、千畳敷は一年中氷に閉ざされ、氷が谷沿いに流れていた。カールはそのときの氷河によって作られた地形である。カールの先端には、氷河によって押し出された石や土が固まってできたモレーンとよばれる大きな丘がある。	駒ヶ根市、宮田村
36	田切地形／田切地形のビューポイント	天竜川の河岸段丘や断層崖を横断するように流れる太田切川や、中田切川、与田切川などが、段丘面を激しく侵食して形成した地形で、伊那谷の田切地形は全国的に最も顕著であることで知られる。田切地形を一望することができるビューポイントとして、陣馬形キャンプ場が挙げられる。	中川村大草(陣馬形キャンプ場)
37	太田切川の井筋	駒ヶ根市や宮田村は太田切川の扇状地上にあり、水を得ることが容易ではないため、農業用水や生活用水の確保に苦労してきた。そこで、扇状地上方の上流側で取水し、そこから用水路を掘って水を兩岸の村へと送ることが考えられた。江戸時代には、太田切川の右岸に上の井、下の井、下平井、左岸に宮田井(黒川井)、丸山井の五用水がつくられた。	駒ヶ根市、宮田村
38	駒ヶ根高原の七名石	駒ヶ根高原には、切石公園を中心に「切石」「重ね石」「地藏石」「袋石」「ござ石」「蛇石」「小袋石」という七つの巨石(七名石)が点在する。氷河の力と、洪水の力によって、駒ヶ岳の千畳敷から運ばれてきた石である。太田切川扇状地を造る巨石は、約10万年前以降、中田切川まで広がっている。当時の太田切川扇状地の広がりには広大であった。七名石のひとつ、切石の直下には活断層があり、地盤の山側が高くなっている。地盤の動きで直上の巨石が割れたものと考えられている。	駒ヶ根市赤穂
39	太田切川 橋場礎石	春日街道は江戸時代初期に完成した街道。その街道沿いの太田切川に架けられた「はね橋」橋脚の礎石。1968(昭和43)年2月、河川工事実施中に川のほぼ中央より発見された。礎石は河床に埋没している巨石(高さ約3m、幅約4.5m)に深さ13cm、径35cmの柱穴が穿ってある。この礎石によって春日街道の太田切川橋場跡が明確になった。この橋は、上野橋または北原橋と呼ばれており、明治中期まで光前寺への参拝道路であった。春日街道橋場跡碑が駒ヶ根側と宮田村側に建てられている。	駒ヶ根市(太田切川橋場)(碑:駒ヶ根市北割一区/宮田村新田区)

No.	名称	説明文	所在地
40	伊那電車軌道 (後の伊那電気 鉄道) / Ωカーブ	伊那電車軌道は1909(明治42)年に一部開通した長野県で最初の民営鉄道。汽車ではなく電車方式による鉄道である。1892(明治25)年に中央線敷設が決定され、伊那谷と木曾谷の間で誘致争いが起こった。伊那谷側にはいくつもの鉄橋が必要であり、工事費が高む上、名古屋への最短ルートではないなどの理由により、誘致は叶わなかった。 伊那電車軌道は、当時隆盛を極めていた蚕糸業(製糸・養蚕・蚕種製造)の輸送を担うため、飯田の漆器商・伊原五郎兵衛等の尽力により開設された。建設費を抑えるために、大きな土工、大きな橋、トンネルを避けるように地形に逆らわずに線路を敷いた。 飯島町の中田切川、与田切川は田切地形のため深い谷となっており、短い橋で川を渡るために上流まで迂回するルートが敷かれ「Ωカーブ」として全国的に有名である。	飯島町
41	濁流の子ー伊 那谷災害の記 録(出版物)	1961(昭和36)年6月下旬に伊那谷を襲った豪雨災害「三六災害」。その災害を目的の当たりにした小学生、中学生、高校生らの作文を集め、1964(昭和39)年に発行された冊子。碓田栄一さんが個人で編集作業に当たった。文集には当時の学童、生徒自身の言葉で災害の恐ろしさ、友人を失った悲しみ、災害で家や田畑を失った状態での不安な高校受験、見知らぬ人々からの励まし、復興の様子などが綴られている。	飯田市
42	百間ナギ / 百 間ナギの ビューポイント	与田切川の源流部に存在する「百間ナギ」と呼ばれる大崩壊地は、すり鉢窪カーブによるモレーン堆積物の砂礫が日夜崩れている。礫層の厚さは60mに達し、現在も常に土砂の流出が続いている。道の駅・花の里いいじま付近など、盆地一帯から大崩壊地を望むことができる。伊那谷は、盆地底から氷河地形を望むことができる、わが国唯一の場所。	飯島町
43	千人塚公園 城ヶ池	千人塚のある土地は、数万年前、岩間断層の上側に形成された変位丘陵の凹地を利用して造られた台地である。1933(昭和8)年秋着工、翌春一期工事終了湛水開始、1939(昭和14)年完成。当時としては大規模な工事の末出来上がった灌漑用ため池。以後、このため池で温められた水が水田を潤すようになった。池の築造は、当時政府が国内で進めていた農村経済厚生事業により展開されたもので、失業者の救済目的も兼ねていた。2010(平成22)年、全国ため池百選に選定。	飯島町七久保
44	日向沢砂防堰 堤	1933(昭和8年)、飯島町七久保日向沢に砂防堰堤が建設された。景観や強度への配慮から間知石積ではなく野面石積とした堰堤。また法切、基礎工事にも工夫を施した。本事業は昭和前半の大不況期に農民を労働者として雇用して救済する「農救事業」により行われた。	飯島町七久保
45	四徳集落跡	中川村の四徳集落周辺地域は小さい谷が網の目のように広がる丘陵地帯で、三六災害時には、土石流が起こり、小渋川合流点で河床が約10m上昇した。中川村の四徳集落では80戸のうち61戸が被災し、7名が死亡した。人々は集団移住を余儀なくされ、700年に及ぶ集落の歴史に終止符を打った。今ではカラムツからなる林に戻っている。	中川村四徳
46	坂戸橋	1933(昭和8)年に完成した優美な鉄筋コンクリートアーチ橋。建設当時、鉄筋コンクリートアーチ橋としては、我が国最大のスパンを誇った。コンクリートでありながら木彫の面取りを採り入れ、柱は上に細くそり立つ。2010(平成22)年に国の登録有形文化財に登録され、信濃の橋百選に選定されている。	中川村大草 ～片桐
47	お志茂の水除 け	前沢川は土石流の頻発する河川で、下流右岸の田島地区新井は、たびたび災害に見舞われた。前沢川の土石流の氾濫原にあったと考えられる松村家(屋号お志茂・松村理兵衛の分家)は、水害から屋敷や、下流の田畑を守るため、上流側に向けて鋭角に石を積み船形にした水除けを造った。場所は、理兵衛堤防の西250mの位置にある。	中川村片桐

No.	名称	説明文	所在地
48	理兵衛堤防	中川村にある、松村理兵衛忠欣、常呂、忠良の三代にわたって天竜川に築かれた堤防。1808(文化5)年に完成。天竜川および前沢川の大水の度に決壊し、そのつど補強や増築を繰り返してきた。2010(平成22)年、護岸工事の際の調査で、前沢川の堆積物の上に造られた石堤が発見された。理兵衛堤防の初期のものと考えられ、一部はそのままの状態で埋め戻し、一部は移築復元されている。	中川村片桐
49	小渋ダム	1969(昭和44)年に竣工。1961(昭和36)年の三六災害後の対策で、小渋川に建設された高さ105mのアーチ式コンクリートダム。洪水調節・不特定利水による天竜川の治水のほか、下伊那郡竜東上段域の農地への灌漑と水力発電を目的とする国直轄の多目的ダム。小渋川総合開発事業の一環として、小渋第1発電所、第2発電所が小渋ダム築造にあわせて建設された。	中川村・松川町
50	滝沢、漆ヶ久保集落跡	滝沢は大鹿村との境にあった中川村の集落で、滝沢川沿いに7世帯が暮らしていた。三六災害とその後の小渋ダム開発により約300年続いてきた集落がなくなった。漆ヶ久保は四徳川沿いの桑原地区からさらに東の中川村地籍の山中にあり、数軒の家があったが、昭和30年の初めには漆沢家1世帯のみが生活をしていた。漆ヶ久保も三六災害の折に大きな被害に合い、漆沢家も村を離れた。当時の集落跡・屋敷跡、屋敷の石垣・水田跡・墓石などの生活遺構が今も山中に残る。	中川村大草桑原
51	分杭峠	伊那市と下伊那郡大鹿村との境界に位置する標高1,424mの峠。静岡県浜松市の秋葉神社へ向かう街道として古くから利用された秋葉街道の峠の一つであり、重要な交通路であった。秋葉街道は、西日本の地質を内帯と外帯に二分する中央構造線の断層谷を利用した街道であり、分杭峠は中央構造線の谷中分水界にあたる。	伊那市長谷市野瀬、大鹿村鹿塩
52	北川露頭	大鹿村を南北に貫く中央構造線北端、鹿塩川沿いに位置する中央構造線露頭。領家変成帯(向かって左側)の花崗岩などと三波川変成帯(向かって右側)の緑色片岩などとの間に2列の異色の断層破碎帯が観察できる。長野県天然記念物に指定されている。2013(平成25)年10月、史跡名勝天然記念物指定に指定された。	大鹿村北川
53	北川集落跡	大鹿村の鹿塩川沿いにあった北川集落は、三六災害が発生した1961(昭和36)年6月27日、豪雨による土石流で39戸の民家と北川分校が土砂の下に埋まった。さらに、29日には西山が地すべりを起こし、鹿塩川を一時的に堰き止めた。鹿塩川に架かっていた橋の取り付け部分が流され、コンクリート部分だけが門のように残る。	大鹿村鹿塩
54	竜西一貫水路	1969(昭和44)年に完成した総延長24kmの西天竜一貫水路とほぼ同規模の大用水。南向発電所(中川村)の放水路から取水し、天竜峡川路、大明神原に至る。これにより、天竜川右岸の扇状地上は、諏訪湖の下流近くから天竜峡に至るまでのほぼ全域が灌漑されることになった。毛賀沢水路橋・胡麻目沢水路橋、田沢水路橋などがある。	中川村、松川町、高森町、飯田市
55	三界萬霊塔／六地藏	高森町市田の三界萬霊塔には、未の満水(1715(正徳5)年)で亡くなった多くの人々や獣などの冥福を祈る言葉が彫ってある。1695(元禄8)年に松岡山安養寺の了溪禅師が建立した。六地藏は宝永年間(1704～1710年)に建立されたが、未の満水で流され、1841(天保12)年に再建された。	高森町下市田
56	夜泣き地藏／出砂原の大石	未の満水の際の土石流で、大島川上流から流されてきた大石。受難者を供養するために二基の地藏があり、夜泣き地藏石とも呼ばれている。石の横を通ると赤ん坊の泣き声が聞こえ、地藏様を建てたら泣き止んだと言い伝えられている。	高森町下市田
57	惣兵衛堤防	村惣兵衛により、1752(宝暦2)年に完成した堤防。大川除堤防、惣兵衛川除とも呼ばれる。出水ごとに補強工事が施され、明治以後、上下流に数条の堤防も新設された。1961(昭和36)年に発生した三六災害によって、惣兵衛堤防は破堤した。現在は「嘉永の水天宮(1850(嘉永3)年建立)」と「惣兵衛翁供養塔」(1854(安政元年)建立)が残る。	高森町下市田

No.	名称	説明文	所在地
58	伴野堤防	惣兵衛堤防と天竜川を挟んで対岸にある伴野村は、惣兵衛堤防からの水はねによる激流によって、たびたび大災害を被り、川除け(堤防)は幾度も流出した。1883(明治16)年、松尾千振は伴野村有志による「開墾組」を組織し、堤防建設を進めた。その後も、堤防補強・修理が行われ、1904(明治37)年に伴野堤防が完成した。	豊丘村神稲
59	竜東一貫水路	「県営灌漑排水事業」として建設された一貫水路。小渋ダムから松川町生田部奈までは発電用水と共用であるが、生田から農業用として分派し、飯田市下久堅まで流れる用水路。1967(昭和42)年着工、1979(昭和54)年に完成したこの用水路により、既成田407ha、開田141ha、畑地238haの計786haが灌漑されるようになった。谷を渡る箇所には、虻川水路橋や小川サイフォンを見ることができる。	松川町、豊丘村、喬木村、飯田市
60	座光寺石川除	天竜川を挟んで対岸にある伴野堤防により跳ね返された激流は、座光寺村めがけて直進していき、座光寺石川除を造る契機となった。伴野堤防完成より22年後の1831(天保2)年に完成した。1961(昭和36)年に発生した三六災害によって、惣兵衛堤防と伴野堤防は多くが失われたが、座光寺石川除の保存状態は極めて良い。	飯田市座光寺
61	大西山崩壊地	1961(昭和36)年6月23日から降り続いた未曾有の豪雨により、伊那谷全域に被害をもたらせた三六災害が発生した。大鹿村では6月29日に、小渋川沿いにある大西山が大崩壊した。崩壊は高さ450m、幅500m、厚さ15mに渡り、大量の石や土砂が小渋川の堤防よりもはるかに高い山津波となって対岸の家屋に押し寄せた。濁流によって約30万㎡の宅地や田畑が消失し、家屋40戸が流され、42名の命が奪われた。	大鹿村大河原
62	小渋橋	三六災害の際に発生した大西山の大崩壊は、42名の命を奪った。三六災害で一帯が賽の河原と化した中で、変わらぬ姿で架かっていた3連アーチの橋。アーチと桁側面のへこみがしっかりと造られ、コンクリート橋の外観を引き締めている。	大鹿村大河原
63	鳶ヶ巣大崩壊地／鳶ヶ巣大崩壊地のビューポイント	大鹿村の上蔵地区から見える、面積が30haにも及ぶ大崩壊地。明治以前から崩壊が続いており、土砂が小渋川をせき止め、たびたび災害を引き起こした。押し出された土砂が小渋川に削られ、何層にもなった礫層が川沿いに見られる。大鹿村上蔵の福德寺(国重要文化財)付近から崩壊地が望め、案内看板もある。	大鹿村大河原
64	上蔵砂防堰堤	1954(昭和29)年に小渋川に築かれた天竜川流域唯一のアーチ式砂防堰堤。(堤高23m、コンクリート造)1959(昭和34)年および1961(昭和36年)の洪水で底が抜けたが、アーチの石積みはそのまま残っていた。2009(平成21)年に国有形文化財に登録された。	大鹿村大河原
65	荒川大崩壊地	荒川岳前岳の頂上近くから一気に崩れている大崩壊地。砂岩・泥岩を主とする地層は、断層破碎を強く受けており、山の隆起に伴って山頂部が年々崩れている。崩壊した土砂は、その後の豪雨により土石流化して下流へ流下するケースが多いと考えられている。崩壊地から供給された岩石が谷を埋積して、広大な「広河原」を形成する。	大鹿村
66	七釜砂防堰堤	仏像構造線(中央構造線の東側に平行して通る代表的な地質境界をなす断層)の位置につくられた砂防堰堤。荒川大崩壊地から流出する土砂を調節するため、高さ28m、堤長122.5m、計画貯砂量121万㎡の砂防ダムとしては大規模なダムが1984(昭和59)年に完成した。破碎帯のため基礎岩盤が深く、堰堤の基礎処理として簡易ケーソン工法を使用している。この工法の堰堤は全国的に珍しい。	大鹿村大河原
67	前茶臼ナギ	小渋川上流上沢に位置する前茶臼山東側に広がる崩壊地。前茶臼山断層に関連して、崩壊が生じている。地質的には秩父帯でジュラ紀付加帯の緑色岩・チャート・石灰岩・泥岩の互層により構成されており、1898(明治31)年及び1929(昭和4)年に大災害が発生したと伝えられている。	大鹿村

No.	名称	説明文	所在地
68	安康露頭	大鹿村を南北に貫く中央構造線南端、青木川沿いに位置する、幅約30mにおよぶ巨大な中央構造線露頭。安康は地名。領家変成帯(向かって左側)の花崗岩などと三波川変成帯(向かって右側)の緑色片岩などとの間に2列の異色の断層破碎帯が観察できる。長野県天然記念物に指定されている。2013(平成25)年10月、史跡名勝天然記念物指定に指定された。	大鹿村安康
69	地蔵峠	中央構造線の断層鞍部に位置する峠。標高1314m。大鹿村の青木川と飯田市の上村川の分水嶺(中央構造線に並んでいる谷中分水嶺のひとつ)となっており、古くから秋葉街道の中の難所の峠の一つだった。古くは「遠山峠」とも呼んだ。名前の由来となった地蔵は、元々は峠の南にある「堂屋敷」地籍に安置されていた、4基のうちの2基を大正時代頃に相次いで、この峠に移転したものである。	大鹿村、飯田市
70	大平峠	飯田市と南木曾町の境にある峠(標高1,385m)。大平街道は伊那と木曾、両方の谷を最短距離で結ぶ街道で、大平峠と飯田峠の二つの峠がある。この道は16世紀後半から活用され、1755(宝暦5)年に飯田藩主堀親長が改修した後は、清内路峠より距離的に近い大平峠が人馬の往来で栄えた。大平には旅籠、休み茶屋、問屋もできて宿場町の機能を持つようになった。明治・大正には大平宿として隆盛した。しかし、飯田線の全線開通、自動車輸送の発達により宿場としての機能は衰え、1970(昭和45)年、集落は集団移住し、廃村となった。	飯田市上飯田
71	松川第一発電所跡	1899(明治32)年飯田電灯(株)は、米国製発電機を使って伊那谷で最初の発電所(松川第一発電所)を建設した。天竜川支流松川の流れを利用。最大出力75kW。1930(昭和5)年に廃止され、現在は、発電に使う水を通した導水路(石積み)が左岸に残っている。	飯田市上飯田
72	松川プール跡	1925(大正14)年、鼎村の本田亥太郎が私有地を提供し、松川の水を引き入れた「松川プール」を建設した。松川プールは周辺の学童・生徒や多くの住民に利用され、水泳大会が開かれた他、プールサイドに植えられた桜が花見の名所にもなり、飯田市郊外の身近な行楽地であった。現在は池となっている。	飯田市鼎
73	めがね橋(長姫橋)	江戸時代、飯田城下町(現飯田市街地)は深い谷(谷川)によって南北に二分されていた。谷川に木橋が架けられたが、橋の南(堀端通り(現銀座通り))と、北(伝馬町)は急坂を上り下りしなくてはならなかった。明治維新後に飯田城が廃城になると、中馬によって物資が集まる交通の要衝として、馬車通行を想定し、橋の前後の坂を埋め立てることとなり、1878(明治11)年、谷川にアーチ型の石橋が完成した。かつての谷川橋が、この時、飯田城の古名を残すために「長姫橋」と改称されたが、その形状から「めがね橋」と通称された。1947(昭和22)年の大火後の改修で正式に「めがね橋」となった。信濃の橋百選に選定されている。	飯田市伝馬町～銀座
74	夜泣き石	未の満水(1715(正徳5)年)の際に、野底川上流の山崩れによって土石流が発生した。この土石流によって野底川の上流から松川合流点付近まで全長7mにもおよぶ巨石が運ばれてきた。子どもが下敷きになって亡くなり、子どもの泣き声が聞こえてきたので、供養のために石の上に地蔵を祀ったとされる。	飯田市上郷別府
75	河原弁天(後ろ向き弁天)	弁天橋下流左岸の河原の自然石の上に祀られ、出水規模の目安にされてきた。天竜川通船の盛んだった江戸時代、商いを営む人たちが祀ったと伝えられる。1738(元文3)年の大洪水で村境の争いが起こったとき、大岡越前守忠相が裁許を下した判決は「大岡裁き」と呼ばれている。	飯田市下久堅下虎岩
76	南原橋	天竜川で最初に洪水でも流されない定橋が架けられたのが、南原橋。1870(明治3)年に完成した初代の南原橋は、橋脚を使わない「はね橋」構造であった。川幅が30間(54m)と比較的狭いが、断崖絶壁の鷲流峡に橋を架ける仕事は容易ではなかった。南原橋右岸川岸には、はね木を支えたと思われる穴が開いている。左岸側にある橋場稻荷境内には、1928(昭和3)年に建てられた南原橋の碑がある。	飯田市下久堅南原～駄科

No.	名称	説明文	所在地
77	時又港	通船の最盛期を迎えた明治の終わりから昭和の初めにかけて、天竜川は伊那谷と遠州地方をつなぐ重要な水の道として栄えた。時又付近の川瀬は深く緩やかに澱み、絶好の船着場であった。その後、各所に設けられた発電ダムにより、水の道は分断されて終焉した。現在の時又港は、観光遊船(弁天港～時又港)の到着場所として利用されている。	飯田市時又
78	川路郷家屋移転記念碑	三六災害により、川路地区の家屋は壊滅的な打撃を受け、災害後移転した。1966(昭和41)年に現在の堤防が完成し、家屋の移転が終わったことを記念して記念碑が建てられた。川路駅周辺の旧国道沿いには170戸が移転した跡地に塀や門が残されている。	飯田市川路
79	三六災最高水位標	天竜川総合学習館(かわらんべ)前にある三六災害時の最高水位を示す標柱。地上から3～4mの高さまで水位が上昇したことが示されている。当初は、旧川路駅前に源實朝八大龍王の鎮魂碑と並んで建っていたが、2002(平成14)年、治水事業が終わった折りに、石柱浸水位線が示す標高376.8m位置の現場所に移転された。	飯田市川路 (天竜川総合学習館前)
80	姑射橋	天竜川随一の景勝地「天龍峡」に架けられた、四代にわたる歴史のある橋。三六災害時の「天竜川氾濫最高水位の碑」が設置されている。信濃の橋百選に選定されている。	飯田市龍江～川路
81	中之橋	我が国最初期の「鉄筋コンクリート製カンチレバー桁橋」の一つで、1932(昭和7)年に架設。県内では1931(昭和6)年に完成した大正橋(千曲市、現存せず)に次いで2番目に古い。完成当初は鉄筋コンクリート桁橋としては最大の支間長26mを誇った。阿知川の洪水に耐えうる永久橋として、1882(明治15)年架設のつり橋や大正年代の架け替えを経て建設された。信濃の橋百選に選定されている。	阿智村駒場
82	恩田井水	阿智村の伍和地区は、下條山麓に発達した扇状地の上部に位置するため、川が集落の遙か下を流れており、明治の頃まで井戸水の確保も困難な土地だった。漢方医の太田宗硯は、1860(万延元)年より地形測量を行い、和知野川流域の浪合地区恩田川の水を流域を越えて伍和まで引けることを確信した。太田宗硯没後、1894(明治27)年に恩田井水組合が水利権を買い取って工事を開始し、1898(明治31)年、日の入峠を越えて引き入れた延長6.5mの井水が完成した。その後、さらに水路は延長され、水田80haが灌漑されるようになった。	阿智村
83	伊那街道(三州街道)	伊那街道は別名三州街道とも呼ばれる。中山道の塩尻宿から分岐し、辰野、伊那、駒ヶ根、飯田と南下、阿智村浪合、平谷、根羽の各村、柚路峠を経て三河足助を経由し、岡崎で東海道に合流する。中馬で荷駄を運ぶ通商の道として、江戸時代には盛んに利用された。現在の国道153号線は、ほぼこの道筋をたどっている。浪合には復元された関所跡がある。	辰野町～根羽村
84	治部坂峠	標高1,187m。治部坂峠は、阿智村(旧浪合村)と平谷村との境にある国道153号線で、三州街道の最高標高地点にある。交通史としては、古くは1533(天文2)年に記録があり、1554(天文23)年には、武田信玄が伊那攻略のための軍用道路として改修した。1593(文禄2)年、飯田城主京極高知により平谷が宿場として制定され、中馬(馬の背に荷を乗せ運ぶ輸送手段)の宿として繁栄した。1891(明治24)年、三州街道として開通し、運送馬車が通行するようになり、1923(大正12)年に、初めての自動車(トラック)が通行した。	阿智村・平谷村
85	遠山の霜月祭	上村と南信濃に伝わる湯立神楽。両部神道による湯立祭りで、清和天皇の859～876(貞観年中)年に宮廷で行われていた祭事を模した湯立が、ほぼ原形のままで伝承されていると言われている。毎年12月に13神社で行われ、深夜には面をつけた舞手が登場する。1979(昭和54)年に国重要無形民俗文化財の指定を受けた。平成25年は、両地区合わせて9神社で行われた(1神社は隔年開催・3神社は休止中)。	飯田市上村・南信濃

No.	名称	説明文	所在地
86	遠山の森林鉄道 梨元貯木場跡	梨元に営林署の貯木場が設けられ、木材を運び出すために使用された鉄道(1944(昭和19)年～1968(昭和43)年)。民間企業(5社)も、台車1台あたりの契約で営林署に使用料を払い、伐り出した木材を自社の機関車で運んだ。いずれも1965(昭和40)年ごろまでに事業を終えて撤収したが、土場の施設は1970(昭和45)年まで使用されていた。民間企業が伐採した木材を、営林署が運び出すのではなく、営林署に軌道使用料を払い、複数の企業が自前で列車を走らせていたという例は非常に珍しい。沿線ではインクラインが木材伐り出しに活躍した。鉄道は遠山川上流の西沢渡まで伸びていた。	飯田市南信濃
87	遠山の埋没林	714(和銅7)年の大地震で山が崩れ、遠山川の堰き止め湖に木々が埋没した。現在は、当時の埋没林が河床に露出しており、南信濃大島、畑上などで見ることができる。これらの木のほとんどは、直径50cm以上の大木で、中には直径1m以上の巨木や樹齢700年以上のヒノキもあった。	飯田市南信濃
88	夜川瀬地区の氾濫	1718(享保3)年の地震(遠山地震)により、盛平山の北斜面が崩落した。この時にできた山が出山(正しくは出震山)であり、亡くなった人の供養塔(片町家の墓標)もある。遠山川が堰き止められて天然ダムができ、のちに決壊し、遠山川沿いにある和田集落の対岸の夜川瀬に土砂が流出・堆積して、氾濫原をつくった。	飯田市南信濃和田
89	名古山の水除け	南信濃の南和田名古山のゆるい斜面は、遠山地震(1718(享保3)年8月22日M7.0)による斜面崩れや、飛び石によってできたものである。その礫斜面を後世の人たちが石積みにして畑や屋敷をつくってきた。江戸時代につくられた水除けの堤防が残っている家があり、昭和の初めの土石流でも家を守った。	飯田市南信濃南和田
90	泰阜ダム	1935(昭和10)年に完成。天竜川流域でのダム開発は、大久保発電所・南向発電所について泰阜ダム、平岡ダムが続く。工事のために、三信鉄道(現飯田線)が敷設された。日本の近代土木遺産(現存する重要な土木構造物2800選)に選定されている。	泰阜村～阿南町
91	南宮大橋	この地は、古くは南宮峽と呼ばれる景勝地で観光船が発着するほど賑わっていた。1897(明治30)年に左岸の泰阜村温田地区、右岸の阿南町御供地区が、中州(中ノ島)を境にそれぞれ木橋とつり橋の二つの橋を架けた(私設有料橋)。1951(昭和26)年に南宮2号橋が架け替えられたが、同じ年、下流に平岡ダムが完成し、堆砂により河床が上昇した。1983(昭和58)年の台風災害では、冠水し阿南高校の生徒が帰宅困難となるなどの被害が出た。1995(平成7)年6月に水面から十分な高さを持つ斜張橋「南宮大橋」に架け替えられた。信濃の橋百選に選定されている。	泰阜村温田～阿南町北条
92	深見池	深見池は最大深度8.5m、周囲700mの天然の湖。伊那谷では最大の天然湖である。1662(寛文2)年の大地震の時にできた大きな地すべりの窪地に七つの池ができ、それがひとつになってできたといわれる。一帯は新第三紀層の富草層群の丘陵地帯であり、この時の地すべりは代表的な第三紀層地すべりであった。地すべりの土塊は天竜川対岸の我科まで届いている。周囲が丘に囲まれていて風による水の循環が少ないため、夏期には水面下4mより深い層には酸素が届かず、硫化水素を含むようになる。水中の硫酸イオン量が多い火山や汽水地域でないにもかかわらず、夏期の光合成硫黄細菌層が発達するのは大変珍しい。国際学会でも発表され、「LAKE FUKAMI IKE」として国際的にも著名になった。	阿南町東條
93	三信鉄道	現JR飯田線の「天竜峽～三河川合(愛知県新城市)(約70km)」区間で、1937(昭和12)年に全線開通した。天竜川の侵食による険しい峡谷に沿って造られており、トンネルが数多い。そのため日本の鉄道史に残る難工事となった。鉄道は、泰阜ダムや平岡ダムの建設資材の運搬などにも大きな効力を発揮した。為栗駅の北西には、信濃の橋百選に選定されている万古川橋梁がある。	新城市川合～飯田市川路天竜峽
94	天竜橋	長野県が管理する唯一のつり橋。天竜川右岸から秘境の無人駅JR飯田線為栗駅に通じる歩行者専用のつり橋である。駅前まで車は入れないが、駅前が県道為栗和合線の起点であるため、県道となっている。信濃の橋百選に選定されている。	天龍村平岡～長島

No.	名称	説明文	所在地
95	羽衣崎橋	天竜川の名勝「羽衣崎」は、平岡ダム湖の湖面となる地にあり、山紫水明の渓谷の自然美と調和したニールセンローゼ形式が採用されている。平岡ダム湖岸道路開設事業の一環として1974(昭和49)年に完成。県最南端地域の生活を支える重要な道にある。	天龍村平岡 ～長島
96	平岡ダム	1951(昭和26)年に完成した発電用ダム。戦前に建設・計画された天竜川流域のダムの中では、最大の高さ(62.5m)であり、天竜川が作り上げてきた渓谷がそのままダム湖となっている。太平洋戦争の時代に中国・朝鮮半島の人々や敵対する米国・英国の連合軍の捕虜を強制的に使役して建設した歴史を持つ。	天龍村平岡
97	新野の雪まつり	新野の雪まつりは、雪を稲穂の花にみたく、大雪(豊年)を願う祭り。祭り当日に雪が降ると豊年になるといわれ、新野に雪がないときであっても、離れた峠から雪を準備し、神前に供える。伊豆神社境内で行われ、田楽・舞楽・神楽・猿楽、田遊びなどの日本の芸能絵巻が徹夜で繰り広げられる。雪(水)への祈りは、豊年願いのほか、様々な水象現象に繋がっている。1977(昭和52)年、国重要無形民俗文化財に指定された。	阿南町新野
98	天龍村の霜月神楽	毎年正月の1月3日から5日にかけて、向方地区(天照大神社 お潔め祭)、坂部地区(諏訪神社 冬祭)、大河内地区(池大神社 例祭)で行われる冬祭り。いずれの祭りもかまどを築いて湯をたぎらせ、それを神々に献じてから人々に振りかけて魂を清め、同時に神歌をうたい、あるいは舞をまうという湯立神楽の形式をとどめており、祭り全体から水の神聖さが伝わる。水を利用した神事は、様々な水象現象に繋がる。1978(昭和53)年、国重要無形民俗文化財に指定された。3地区のうち坂部は、仮面の舞など豊富な内容をもっている。	天龍村向方、坂部、大河内
99	法華道	甲斐の国と信州高遠を最短(全長約22km)で結ぶ道。 甲州街道から富士見町の若宮で分かれ、入笠山東斜面を登って大河原湿原一仏平峠―荊口―山室を通って非持に至る道。道沿いには多くの古刹が並び、信濃への法華経伝来の足跡を今に伝える歴史の道でもあったことから、「法華道」と呼ばれた。 一説には、御所平峠―芝平―荊口―山室への道筋も法華道と言われ、鎌倉時代、御所平峠は、高遠から芝平を通り、富士見の鎌倉街道へ通ずる重要な峠であり、特に武士にとっては、重要な間道(抜け道)であった。南北朝時代、宗良親王が下伊那大河原(現・大鹿村)に館を構えて、ひそかに関東武士と連絡を取りながら、戦いの時が来るのを待っていた時代の話である。	伊那市高遠 町芝平
100	柵立堤防	伊那市野底は、東方から棚沢川、西方から大泉川が天竜川に合流している場所に位置しており、両支流の押し合いで天竜川の流れは安定せず、毎年のように洪水が田を荒らしていた。そのため古くから堤防を築き、壊されるたび修築し、懸命に洪水を防いでいた。 高遠藩の阪本天山は1783(天明3)年に郡代へ就任。藩は深刻な財政難であったが、私財もなげうち、人夫数十人を率いて、毎日河岸に出向いて工事を監督し堤防を築いた。1808(文化5)年に水制工事を行い霞堤防を設け、1852(嘉永5)年には、大規模な柵立木工沈床工事による押出堤防を築いた。大型の柵のような堤防であったため、柵立堤防と呼ばれる。	伊那市野底
101	隅之木碑	与田切川は大雨のたびに氾濫を繰り返す暴れ川であった。未の満水として知られる1715(正徳5)年6月1日夜にも、与田切川が氾濫し、右岸の扇状地に位置している飯島町本郷に土石流が押し寄せた。低地に住んでいた人々は、小高い土地に立っていた周囲約6mもある通称「隅の木」とよばれる栗の大木の周りに集まり、避難して助かった。「ある者は木によじ登り、ある者は幹に抱きつき、体を寄せ合い、一人も流されることなく難を逃れた」という昔話も残っている。 その栗の木は長い間、土地の人たちに感謝されてきたが、明治時代にこの木が枯れ始めた。木の所有者が、この恩を後世に伝えるために1929(昭和4)年に建てたのが、この「隅之木碑」である。石碑は、土砂災害の恐怖と、危険を察して一刻も早く逃げる事の大切さを伝えている。	飯島町本郷